

令和 5 年 6 月 22 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02754

研究課題名（和文）描画材の段階的併用による表現力向上のための基礎研究

研究課題名（英文）Basic Research for Improving Expression by Stepwise Combination of Painting Materials

研究代表者

溝口 昭彦（MIZOGUCHI, Akihiko）

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：40779948

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、青年期における絵画表現の危機を克服することを目的とした。その原因の一つを写実表現の未達成感と仮定して、描画材を段階的に使用する過程において、題材観察によって得られた知覚と表現を意識化することにより、自己表現の肯定感を高めることを解決策とした。

実践研究においては、色鉛筆、アクリル絵具、油絵具を段階的に併用する高校生対象の授業試案を教材開発して、芸術系高等学校で実践研究を進めた。その結果、油絵具の使用は、芸術系高等学校では効果があるが、普通科高等学校の美術1を対象とした場合、実施に必要な時間や技法の専門性においての課題が確認できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、絵画専門教育と美術科教育学の架橋的研究を実践したことにある。その成果として、絵画表現における材料特性や技法を、受講者の知覚と表現に関連付けることにより授業試案を教材開発できたことにある。また、その授業試案は、幅広い表現欲求に対応可能にするため、2種類の授業試案で構成した。

社会的意義としては、高等学校の授業や部活動で実施可能な条件を満たし実践研究を進めたことや、公開研究会の実施とその報告書を高校教員に送付することにより研究成果を情報共有できたことにある。その情報共有は、高等学校美術授業への描画材の段階的併用技法導入につながり、青年期における表現離脱克服の一助になる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to overcome the crisis of pictorial expression among the adolescents. The solution was to increase the sense of affirmation of self-expression by making the students aware of the perception and expression obtained through observation of the still life in the process of using painting materials in stages.

In the practical research, a trial lesson plan was developed for high school students using color pencils, acrylic paints, and oil paints in stages, and practical research was conducted at an art high school. As a result, we confirmed that the use of oil paints was effective in art high schools, but that there were issues regarding the time required for class implementation and the expertise of the techniques used when targeting Art 1 in general education high schools.

研究分野：芸術実践論・教科教育学

キーワード：絵画技法 美術科教育 絵画表現

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

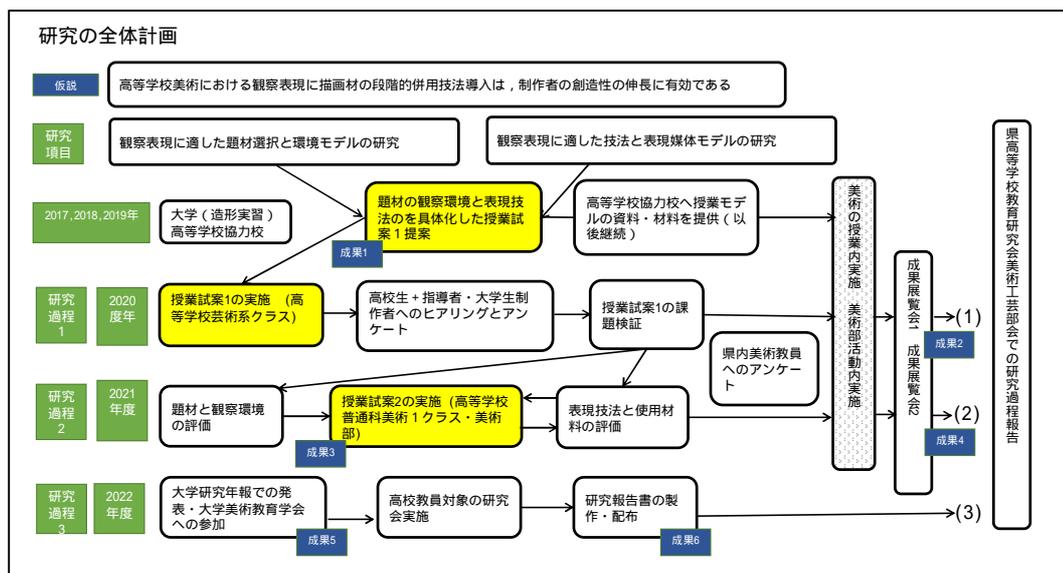
研究代表者は、現在まで広義のミクスト・メディアを研究領域として、作品制作と研究を進めたが、美術表現と表現媒体選択の研究成果を美術教育に還元するために、中学から高等学校美術教育において使用頻度の高いアクリル絵具と、絵画表現の歴史上最も多く使用された油絵具を段階的に使用する描画法の教材開発に2016年度より着手し、大学生を対象に制作実験を試みた。そこから導き出された研究の根本的概念は『青年期の表現分野の学びにおいて、「観察して描くこと」が、制作者の創造性の伸長に寄与するのか』であった。その問いの解決のために「美術教育における観察による表現は、制作者の創造性の伸長に有効である」という仮説をたて、その検証実践の場を、高等学校の美術教育現場とした。特に美術に興味がある青年期の生徒が表現意欲を失わずにその危機を乗り越えることを可能にする [観察表現に適した題材選択と環境モデル] [観察表現に適した技法と表現媒体モデル] について考察と研究実践を進めた。

2. 研究の目的

本研究は、青年期に見られる写実的表現欲求とその未達成感から生じる絵画表現離れを乗り越えるための表現方法の実践研究である。特に中学校美術(必修)から高等学校美術(必修・科目選択)における絵画表現題材および材料の連続性と発展性を考慮するとともに、美術部活動の絵画表現導入として、創作活動に関わる青年期の危機を乗り越える一助になる表現方法と材料選択の考え方を研究する。具体的には、高等学校美術における観察表現の学習に、描画材の段階的併用技法導入のための授業試案を創出してその有効性を検証する。

3. 研究の方法

研究の方法は、高等学校研究協力校における実践研究とした。事前研究で開発した授業試案をチームティーチングで実施して、映像記録とアンケートを実施した。アンケート調査と研究協力教員との協議により授業試案を美術において実施可能にするための課題を解決して改良を重ねた。あわせて、高等学校における観察表現に描画材の段階的併用技法導入に関する有効性を検証した。研究方法の詳細は、図1及び以下のとおりである。



表や、公開研究会の開催及び報告書の県内高等学校美術教員への配布を実施した。

4. 研究成果

(1) 実践研究の実施結果

実践研究は、図2通り実施した。研究協力を県内に3校に依頼して、美術専門、美術、美術、美術部活動で、授業試案1、2を実施することができた。また、対象実験資料として、絵画制作経験の豊かな一般美術愛好者を対象に、授業試案2を実施後、同じアンケートを実施して検証資料とした。

実践研究における条件および環境の差異について

実践研究	授業・事業名(実施クラス数)	実施場所	実施対象	授業試案	総参加人数(人)	授業人数(人)	平均年齢	実施時間	実施年
参考1	絵画表現の指導、造形実習(絵画)、1クラス	大学・絵画実習室	大学生	授業試案1	36	3~11	21	10~20	2016~2022
参考2	高等学校教諭 授業力向上研修講座「教科等」美術、1クラス	県立総合教育センター	県内高等学校美術教諭	授業試案2	10	1~7	不明	3~6	2018. 2020. 2022
1	美術専門授業(絵画)、1クラス	公立A高等学校美術室	美術専門選択者	授業試案1	44	8~13	17	18~20	2017~2020
2	美術I授業、4クラス	公立A高等学校美術室	美術1選択者	授業試案2	66	4~32	16	8~12	2021
3	美術II授業、1クラス	公立B高等学校工芸室	美術2選択者	授業試案2	4	4	18	24	2021
4	大学アートスクール絵画1、1クラス	公立B高等学校美術室	美術部所属者	授業試案2	10	10	17	6	2021
5	大学アートスクール絵画2、1クラス	公立C高等学校一般教室	美術部所属者	授業試案2	7	7	17	6	2021
6	A市絵画研究会、1クラス	A市図書館多目的室	一般美術愛好者	授業試案2	12	12	68	6	2021

*授業試案1は、色鉛筆・アクリル絵具・油絵具の段階的併用技法 *授業試案2は、色鉛筆・アクリル絵具の段階的併用技法

図2

(2) アンケート結果の総括的な評価

描画材の段階的併用技法を導入した授業試案実施に関わるアンケート結果の総括的な評価は、「観察表現に関する興味」の質問に対して、「興味が増した」回答した受講生は76%であった。(図3)「題材の観察力向上(ものの見方)」についての質問に対して「向上した」と回答した受講生77%であった。(図4)「観察表現における表現力向上」の質問に対して「向上した」と回答した受講生は72%であった。(図5)総括評価として全ての項目で70%以上の回答があり授業試案の教材自体の総括的な評価は高い評価を得た。

(3) 知覚と表現の関係(自作の客観視)に関するアンケート調査

受講者の本質的な資質能力の伸びを確認することを目的に、受講者自身が制作を通じて、知覚と表現の関係性をどのように実感しているかを確認する質問方法で、2019年より画材を段階的に使用する機会に準じ、自作を客観視するアンケートを開始した。(図6、7、8、9)

図6「デッサンの転写時における形態や配置について客観視」の質問に対して、70%の受講生が「形態や配置(構図)について客観視できた」と回答した。

図7「グレース時における作品の奥行きについての客観視」の質問には、69%の受講生が「グレース表現の過程で奥行きや空間を客観視できた」と回答した。これは、画面の全面に半透過層絵具の重層により、一時的に画面上の背景と題材の明度差が弱まることにより空間的均衡が生まれる。その状態に再度白色浮出を加えることによって前後関係や空間を表現することに関する質問である。

図8「有彩色グレースによる微妙な表現に関わる客観視」の質問に、68%の受講生が「題材の明暗や色彩が観察できた」と回答した。有彩色グレースにより

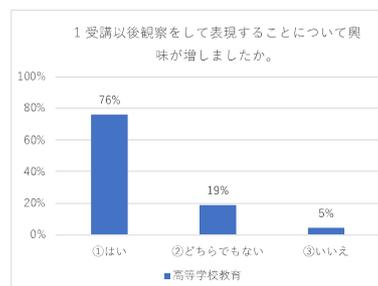


図3

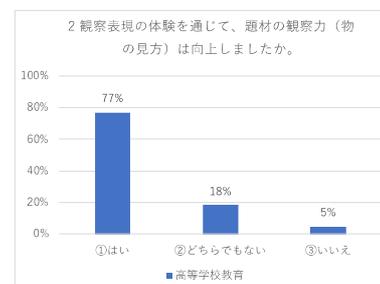


図4

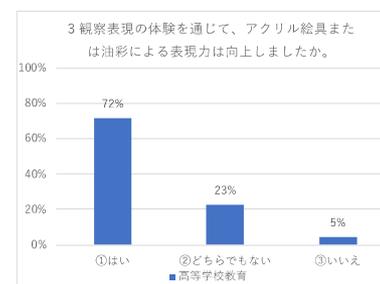


図5

半透過性色彩層の重層により、明度や彩度が低下する場合があるが、再び部分的な白色浮出を施すことにより、明度や彩度を上げることも可能である。そのグレースと白色浮出を繰り返す描画行為がもたらす、観察力の伸長に関する質問である。

図9は「白色浮出により自分の作品の立体感や存在感を客観的に観察することができたか」の質問に80%の受講者が「観察することができた」と回答した。これは、白色浮出をする際に、題材の明部の変化や立体の構造的性を意識した観察と表現を往還することにより、立体感をはじめ、言語化し難い存在概念を、物との接地面の強い影や反射光を意識することにより観察可能になったかを確認する質問である。

(4) 実践研究結果のまとめ

高等学校美術において実施可能な描画材の段階的併用技法による授業試案の開発

- a 図10 授業試案1は、色鉛筆・アクリル絵具・油絵具の段階的併用技法であり、絵画の専門教育に成果を上げた。(図11)
- b 図12 授業試案2は高等学校での開講が一般的な美術の授業実施を想定して、美術教員対象アンケート調査を実施して改善項目の根拠とした。その結果、実施時間短縮や費用を含めた教材準備改善の意見があったことから、油彩によるグレース表現をアクリル絵具のメディウムで代替することにより、色鉛筆とアクリル絵具の段階的併用に絞った授業試案2を開発して授業実施した。(図13)
- c 実施対象を美術1受講者、美術2受講者、美術部員、一般美術愛好者と拡大して実践研究を実施した結果、高校生を対象とした受講者アンケート調査からは、技法や用具・材料評価に課題が残ったが、教材としての全体評価や受講者の知覚と表現に関する評価は高いことが確認できた。

アンケート調査による授業試案1、2についての課題解決と有効性の検証

実施対象や実施人数等様々な条件下で有効性を確認した。

- a 授業試案2は、40人程度の集団において12時間で実施可能な授業試案を目指したが、実施したアンケート結果からは、少人数で想定より長い時間での実施環境において高評価であった。
- b 美術部等の絵画制作経験がある集団においては、想定時間より短い時間で効果が上がった。
- c 自作の客観視についてのアンケート実施結果から、描画材を段階的に併用することにより、制作者が知覚と表現の関係性を意識していることが確認できた。

公開研究の実施

公開研究会開催によるアンケート結果や資料の検証を目的に、描画材の段階的併用技法導入に関する公開研究会を実施した。授業試案の実施に参画した4名すべての研究協力教員をパネリストとして、アンケート調査結果や作品写真を検証した結果、授業試案1、2について、その有効性と課題が確認できた。あわせて、協議においては、授業試案の実施が青年期における絵画表現離脱を克服する一助となることも確認された。

公開研究会報告書の配布

公開研究会報告書に研究のまとめとパネリストの発言をまとめ、岩手県内高等学校美術教員に送付することにより情報の共有を図った。

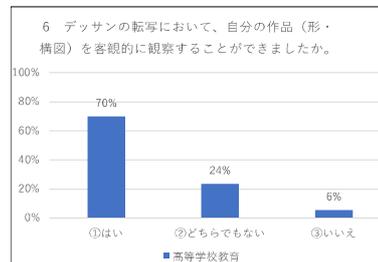


図6

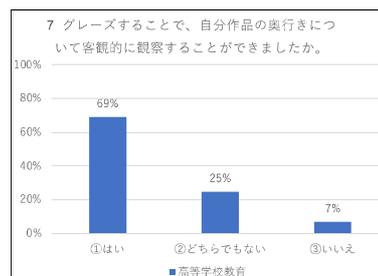


図7

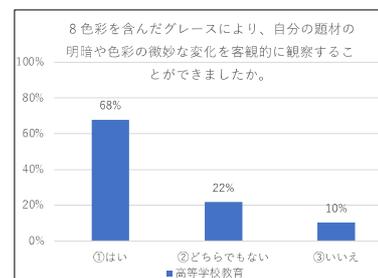


図8

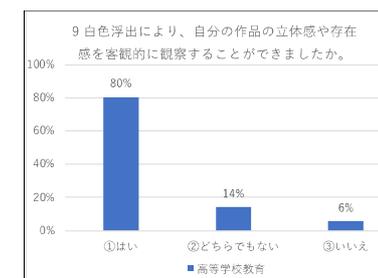


図9

1 描画前の準備		2 下書き		3 転写		4 アクリル絵具と油絵具の混合技法		
有色地塗り		①支持体へ下書き用紙をテープで仮止めする		①支持体へ仮止めた紙を取って、下絵の完成した紙を上下左右に動かし、最後の構図の調整		下層描き (アクリル絵具)		
①支持体製作 a 支持体 (シナベニヤパネル) にマスキング b 1回目地塗り c 地塗りの耐水ペーパーによる研磨 d 2回目の地塗り e 2回目の耐水ペーパー研磨と拭き取り		②紙にF4号の枠を鉛筆で描きだし、題材を観察し、輪郭線を主とした鉛筆デッサン		②下絵裏面に白墨の粉を付ける		白色浮出		
②モチーフ台製作 a ダンボールへの製図と組み立て b モチーフ台への暗色色画用紙貼り付け		③構図の確認		③再度、紙を支持体にはり、硬度の高い尖った芯の鉛筆で、下絵の線の上をなぞる		グレース (アクリル絵具)		
③題材配置 a 題材配置 b 構図検討 c 主題生成				④下絵の紙を取り去る前に一部めくり転写状態の確認をする		③アクリル絵具での白色浮出により、量感と空間が出てきたら、アクリル絵具に彩色ジェルメディウムと水で透過性を調整しグレースしていく		
						④グレース後、画面の明度対比が落ちてきたら、再度明部や空間の前面にチタニウムホワイトをハッチングする		
						⑤ ③④を繰り返し行い絵画空間や色彩調整をする		
						⑥アクリル絵具の描きこみで全体のバランスが整ったら、油彩に移行する		
						②油絵具の透明性の強い絵具にペインティングオイルとバンドルを加える。最初のグレースは、透過性を生かしながら進める		
						プリマ描き		
						①グレース表現に慣れてきた段階で、透過性を調節や、一部不透明層を利用し仕上げる		
大学実習1 (90分)		大学実習2 (90分)		大学実習3 (90分)		大学実習4 (90分)		大学実習5 (90分)
大学実習6 (90分)								
高校授業1-4 (45分) × 4		高校授業5-7 (45分) × 3		高校授業8-11 (45分) × 4		高校授業12-17 (45分) × 6		

図 10

授業試案1 (色鉛筆・アクリル・油絵具) 芸術系高校2年生 (18~20時間) F4号 333×242mm SM (サムホール)158×227mm

①2017 F4 ②2018 SM ③2019 SM ④2020 SM

図 11

1 描画前の準備		2 下書き		3 転写		4 ダーマトグラフとアクリル絵具の段階的併用		
有色地塗り		①支持体へ下書き用紙をテープで仮止めする		①支持体へ仮止めた紙を取って、下絵の完成した紙を上下左右に動かし、最後の構図の調整		下層描き (ダーマトグラフ+アクリル絵具)		
①支持体製作 a 支持体 (シナベニヤパネル) にサムホール規格でマスキング b 1回目地塗り パートアンバー・ジェッソン+ジェッソン+モデリングペースト		②紙にの枠を鉛筆で描きだし、題材を観察し、輪郭線を主とした鉛筆デッサン		②下絵裏面にダーマトグラフ白でなぞる		白色浮出		
②モチーフ台製作 a こげ茶色画用紙+セント紙+し字金物		③構図の確認		③再度、紙を支持体にはり、硬度の高い尖った芯の鉛筆で、下絵の線の上をなぞる		グレース (アクリル絵具)		
③題材配置 a 題材配置 b 構図検討 c 主題生成				④ 下絵の紙を取り去る前に一部めくり転写状態の確認をする		①転写された線をよりどころに、題材をよく観察し、ダーマトグラフで明部の塗りこみとハッチングをする		
						②アクリル絵具のチタニウムホワイトにペインティングメディウムを加え、水で濃度を調整し、明度を調整する		
						③ グレース後、画面の明度対比が落ちてきたら、再度明部や空間の前面にチタニウムホワイト・ダーマトグラフ白でハッチングする		
						④ 上記①②を繰り返し行い絵画空間や色彩調整をする		
実物観察・観察環境・陰影・反射・魅力的題材		形態・大きさ・配置・前後・均衡・量力		構図・客観視・再観察		明暗・光・陰影・立体・筆触・客観視		
						空間・平均化・感覚・現実感・強調・調整・色彩・重層・客観視		
						質感・密度・存在・客観視		
高校授業1-2 (45分) × 2		高校授業3-4 (45分) × 2		高校授業5-6 (45分) × 2				

図 12

授業試案2 (色鉛筆・アクリル絵具) 高校1年生 12時間 SM (サムホール)158×227mm

2021 SM A組 2021 SM A組 2021 SM A組

図 13

* 本報告書に掲載した図1~13は、第61回大学美術学会「高等学校における絵画表現に関する実践研究報告 - 描画材の段階的併用技法の導入について - 」および『岩手大学アートフォーラム アートスクール2022 絵画「高校生と絵画表現」高等学校における描画材の段階的併用技法の導入に関する公開研究会報告書』において使用したデータを再掲載したものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 溝口 昭彦	4. 巻 2
2. 論文標題 高等学校における絵画表現に関する実践研究報告3	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要第2巻(2022)	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 溝口昭彦	4. 巻 第1巻
2. 論文標題 高等学校における絵画表現に関する実践研究報告2-段階的併用技法における客観視について-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩手大学教育学部附属教育実践・学校安全学研究開発センター研究紀要1巻（2021）	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 溝口昭彦
2. 発表標題 高等学校における絵画表現に関する実践研究報告 - 描画材の段階的併用技法の導入について -
3. 学会等名 第61回大学美術教育学会宮崎大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 溝口昭彦	4. 発行年 2023年
2. 出版社 岩手大学アートフォーラム・岩手大学絵画研究室	5. 総ページ数 38
3. 書名 高等学校における描画材の段階的併用技法の導入に関する公開研究会報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------